論　文

フェミニスト作家ができるまで（1）

── ヴァージニア・ウルフの幼年時代 ──

片　山　亜　紀

はじめに

英語圏には「フェミニスト作家（feminist writer）」という呼称がある。フェミニズムの意識を持った作家のことである。「フェミニズムの意識」とは，社会に女性差別がはびこっているという現状認識と，それを是正したいという強い思いのことと定義しておこう。そうした思いを込めて文章を綴る人がフェミニスト作家である。その文章はエッセイであることもあるが，小説を指すことも多い。たとえばマーガレット・アトウッド，アリス・ウォーカー，トニ・モリスンなどが，代表的フェミニスト小説家＝フェミニスト作家としてしばしば言及される。

ヴァージニア・ウルフはフェミニスト作家だろうか？　英語圏ではアトウッドらの先輩格のフェミニスト作家と広く認知されており，フェミニズムという要素なくしてウルフについて語るのはほとんど不可能である。しかし日本では，ウルフの小説内のイメージや言葉に注目する場合など，フェミニズム抜きにウルフについて語ることもある。これは，ウルフの作品は翻訳されても，ウルフがどんな状況下でものを書いていたのかまでは伝わってこないからかもしれない。あるいは文学とは主義主張を超越した場であるとの前提が根強いのかもしれない。

本稿では，ウルフがフェミニスト作家になっていった軌跡を彼女の幼年時代に探る。ウルフの子ども時代，すなわち 1882 年に彼女が生まれてから 1895 年に母ジュリア・プリンセプ・スティーヴンが病死するまでの13年間は，晩年の彼女が「あのすばらしい大聖堂のような空間」（Woolf, “A Sketch of the Past”

81）と回顧するものとなった。彼女は33歳で初めて小説を発表するが，それから何度となくこの13年間に立ち帰ってイメージやエピソードを取り出し，加工し，作品に用いた。そして同時に，子ども時代に体験したことをフェミニズムの視点から分析した。

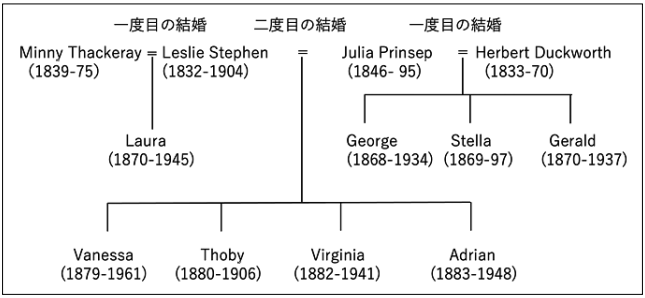
そうした特別な13年間は，実際のところどのように生きられたのだろうか？そのすべてを再現することは不可能だが，本稿ではその最初の10年ほどの期間について，ウルフの伝記，ウルフ本人および姉の書いた回想録，両親の残した文章などを手がかりに，フェミニスト作家ウルフの原体験を探りたい。

一般に，人はいっぺんにフェミニスト作家になるとは限らない。フェミニズムの意識が先行することも，ものを書きたい，物語を語りたいという衝動が先行することもある。以下見ていくように，ウルフの場合は明らかに後者だが，のちのフェミニズムの原点となる体験も経ている。

なお，「ウルフ」姓は結婚してからのもので，生まれたときの名前はアデライン・ヴァージニア・スティーヴンである。以下，紛らわしさを避けるために「ヴァージニア」と呼ぶ。

言葉を操り，お話を作る子ども

ヴァージニアは1882年1月25日，ロンドンのハイド・パーク・ゲート[1)] 22番地で生まれた。父レズリー，母ジュリアはともに前のパートナーと死別しており，それぞれ子をともなっての再婚だった（下の家系図を参照）。夫婦はさらに4人の子をなし，ヴァージニアは総勢8人きょうだいの下から2番目の子となった。22番地の家にはジュリアの母マライア・ジャクソンが滞在していることが多く，7～8人の住み込みの女性使用人たちもいて，ヴァージニアは大所



帯の中で育った。

のちに画家になった姉のヴァネッサは，回想録「ヴァージニアの子ども時代についての覚え書き」で，ヴァージニアは2歳になっても「はっきりと喋れなかった」（Bell 55）ために，姉である自分を心配させたと書いている。しかしヴァージニアが喋り始めると言葉は「この上なく恐ろしい武器」（Bell 56）となり，ヴァージニアの鋭い一言に，ヴァネッサも兄のトービーも急所を突かれることが少なくなかった。

5歳になると，ヴァージニアはお話の語り聞かせを好んだ。あるとき父のレズリーは，数日家を空けたらしいジュリアに手紙を書いて，「ジニア〔ヴァージニアの愛称〕が毎晩わたしに『お話』を聞かせてくれる」「あまり代わり映えしないが，あの子は楽しんでいるらしい」と報告している。同じ手紙には次のような報告もある――「今夜はスピーチをしますとジニアは言った。窓辺に立ち，鳥だとか本だとかについて長々と演説を続けたので，最後は聴いているほうが咳払いをして座らせた。いまのいままで続けたかもしれないよ」（Lee 107）。あるときは物語を，あるときはスピーチを家族に披露しようとしている幼い子どもの姿が浮かぶ。

こちらはやはり5歳前後のヴァージニアが母に書いた手紙で，荒唐無稽な想像が記されている。

> お母さまへ……ミセス・プリンセプ〔ヴァージニアの伯母セアラ〕はゆっくりの列車でしか行かないそうです　はやい列車は事故になるからですって　70歳のお年寄りの話をしてくれました　足が列車の車輪に挟まって列車が動き出して　お年寄りは引きずられて　列車に火がついて　お年寄りが足を切ってくれと叫んだのにだれも来なくて　そして炎で焼かれたんですって。さようなら　あなたのいとしいヴァージニアより。（Lee 107）

老人が列車で散々な目に遭う話である。あまりに途方のない展開なので，セアラ・プリンセプの言葉を子どもが思いつくままに膨らませたものと見るのが妥当だろう。手紙を受け取った母の反応が気になるが，案外，平気だったかもしれない。不注意な人がとんでもなく大変な目に遭うというのは，ヴィクトリア時代の子ども向け教訓譚によく出てくる展開で，ヴァージニアはその展開にならっていると考えられるからだ。

7歳くらいになると，ヴァージニアは続きものの物語を作って語るようになった。先の回想録で，ヴァネッサは夜の子ども部屋での恒例のやりとりのことも思い出している。ヴァネッサがヴァージニアに「さあ，クレメンテちゃん」と言葉をかけると，ヴァージニアは語り手クレメンテになりきって，ハイド・パーク・ゲートの隣人一家の物語を語り始めたという。「隣家の子ども部屋の床下からたくさん金貨が発見されるという筋書きだった。それから素敵なものを，とくに食べ物をありったけ買いましたという描写が続いた。とはいっても，たいていそれはあまり値の張らない卵とベーコン —— わたしたちの大好物のことだった」(Bell 59)。

物語とは「これがこうしてああなって……」という出来事の展開からなるが，ヴァージニアには幼いころからそうした展開を作り出す力が備わっていたようだ —— ここに未来の小説家の萌芽を見て取ることができるだろう。ヴァネッサは回想録でこうも語っている —— 「物心つく前から，ヴァージニアは作家に，わたしは画家になるつもりだった」(Bell 63)。幼いころからヴァージニアは自覚的に作家になりたいと望み，ストーリーテラーとしての才能を発揮していた。

世界との一体感

しかしストーリーテラーとしての能力だけが，のちの作家ヴァージニア・ウルフを支えたわけではない。彼女の小説にはたしかに物語が思いがけない方向に発展していく面白さがあるが，その展開をさえぎるような特別な瞬間がそこここに挟み込まれているのも大きな特徴である。実はそうした特別な瞬間も，ヴァージニアは幼い頃から体験していた。そこで得た感慨はだれに告げるでもなく記憶の中にしまわれ，大人になって表現手段を獲得してから作品の中で使われることになった。

幼いヴァージニアがそうした特別な瞬間を数多く体験した舞台となったのは，別荘タランド・ハウスだった。先に述べたように，ヴァージニアはロンドンのハイド・パーク・ゲート22番地で生まれている。夜ごと彼女が「クレメンテちゃん」を演じていたのはこの家の子ども部屋においてであり，ヴァージニアは22歳までこの家で暮らした。しかし子ども時代のより強烈な記憶となったのは，毎年，夏の2, 3ヶ月ほどを家族で滞在した，セント・アイヴズの別荘タ

ランド・ハウスのほうだった。

イギリス南西端コーンウォール州にあるセント・アイヴズは，いまでこそ美術館の点在する瀟洒なリゾート地だが，当時はようやく鉄道が開通したばかりのひなびた漁村だった。ヴァージニアが生まれる一年前の1881年，レズリーはコーンウォールを旅行して手付かずの自然に魅了され，ちょうど借り手を募集していたタランド・ハウスという高台の家を借りた。翌年から，一家は夏ごとに一日がかりで列車を乗り継ぎ，この家に滞在することになる。それはヴァージニアが生まれた1882年から，12歳になった1894年まで毎年続き，1895年5月のジュリアの死によって唐突に終わった。ジュリアがいないのに同じように夏を過ごすのは耐えられないと思ったレズリーが，タランド・ハウスを手放したのだった[2)]。

このタランド・ハウスで，ヴァージニアは大きくわけて三種類の瞬間を体験している。まずはロンドンから到着し，子ども部屋で一晩眠ってから目覚め，波の音を聴きながら室内を見るともなく見ているという瞬間である。以下，回想録「過去のスケッチ」の冒頭から引用してみたい。

> もしも人生というものが何か台に載っているものだとしたら，もし人生が器で，人が満たして，満たして，満たしていくものだとしたら――わたしの器は間違いなくこの記憶の上に載っている。それはセント・アイヴズの子ども部屋のベッドで，なかばまどろみ，なかば目覚めながら横になっている記憶だ。それは波がいち，に，いち，に，と砕け，浜辺に水しぶきを打ち寄せて，そしてまた黄色のブラインドの向こうで，いち，に，いち，に，と砕けるのを聴いている記憶だ。風がブラインドに吹きつけ，ブラインドがその小さな玉を床の上で転がすのを聴いている。横になり，そうやって水しぶきの音を聴き，そうやって光を見ながら，ここにいるなんてほとんどありえないと思い，想像するかぎりもっとも純粋な恍惚感に浸っている。（Woolf, “A Sketch of the Past” 64-65）

ヴァージニアは寄せては返す波の音を聞き，ブラインド越しの朝日を浴び，風を感じ，ブラインドの紐についた小さな玉が床の上を転がっていく音に耳をそばだてている。自己が外の世界と溶け合っているようなこの瞬間に，彼女は世界との一体感を得ているようだ。

「過去のスケッチ」において，ヴァージニアはタランド・ハウスでのこのひとときを「わたしのあらゆる記憶の中でいちばん重要なもの」（Woolf, “A Sketch of the Past” 64）と呼ぶ。なるほどこの瞬間は彼女の根底をなすものと感じられていたようで，小説に幾度も表現されることになった。たとえばヴァージニアの伝記を書いたハーマイオニ・リーは，『ジェイコブの部屋』（1922）の草稿で，ほぼ同じディテール —— 黄色のブラインド，波の音，ブラインドの紐につけられた玉が床をこする音 —— が使われていると報告する（Lee 23-4）。『ジェイコブの部屋』完成版では削除されてしまうディテールだが，作者が幼少時の記憶をいかに鮮明に持ち続けていたかを示す事実である。

『灯台へ』（1927）はタランド・ハウスでの滞在を下敷きにした自伝的小説で，第二部の最終セクションに，島の上にあるという設定の別荘に10年ぶりにやってきたリリー・ブリスコーが，波の音を聞きながら安心して眠りにつく印象的な場面がある。

> 海が島々をすっかり取り囲み，一定間隔で打ち寄せては溜息をついているその様子は，みんなを落ち着かせた。夜がみんなを包み込んだ。眠りを破るものはなかった。やがて鳥たちが動きだし，かぼそい啼き声が白々とした夜明けに混じり合い，荷車がゴトゴトと音をたて，犬がどこかで吠え，太陽がとばりを上げてみんなの目にかかっていたヴェールを破ると，リリー・ブリスコーは眠ったまま身じろぎした。崖の縁から落ちそうになった人が芝生をつかむように，毛布を掴んだ。目を大きく開けた。（Woolf, *To the Lighthouse* 116-17）

睡眠中のリリーは，「みんなを落ち着かせ」る安心感に包まれている。目覚めとともにその感覚は意識の奥底に追いやられてしまうが，意識下に存在し続け，最後の場面でのヴィジョン獲得までリリーを導いていく。

フェミニズムの原体験

明け方の子ども部屋のひとときは幸せそうだが，ヴァージニアは悪夢のような瞬間も体験していた。タランド・ハウスで，他の家族がいないあいだに異父兄ジェラルドに身体を探られ，性的な侵害行為を受けている。このときのこと

を「過去のスケッチ」では次のように回想している。

> ダイニングのドアを出てすぐのところに，お皿を立てかけておく台があった。一度，わたしがまだとても幼かった頃，ジェラルド・ダックワースがこの台にわたしを載せて座らせたまま，わたしの体を探り始めたことがあった。彼の手がわたしの服の下に入り，ためらうことなく着実に下へ下へと降りていく感触を思い出せる。やめてほしいと願ったこと，硬直し，手がわたしの性器に近づいたときに身をよじったことを覚えている。でも止まらなかった。手はわたしの性器も探った。わたしは憤り，いやだと思ったのを覚えている。あれほどまでに言葉にならない入り混じった感情をどう形容したらいいのだろう？　いまも思い出せるのだから，強烈な感情だったはずだ。これは体のある部位についての感情は――触らせてはならない，触らせておくのは間違っているという感情は――本能的なものだと示しているように思う。これは，ヴァージニア・スティーヴンは1882年1月25日に生まれたのではなく，何千年も前に生まれ，過去のたくさんの女の先祖たちが獲得した本能に，最初から出会わねばならなかったということを示している。（Woolf, “A Sketch of the Past” 69）

この回想を記した2年後，彼女は作曲家にして友人のエセル・スマイスへの手紙でもこのときの体験に触れ，自分は「6歳前後」だったと書いている――したがってジェラルドは18歳前後だったことがわかる（Woolf, *The Letters* 460）。回想録のこの部分を執筆していた彼女は57歳だったから，およそ半世紀の年月が経っている。この事実を彼女が紙面に記したのはこれが初めてだったようで，幼いときの被虐体験がいかに深いトラウマを残し，被害者に沈黙を強いるかがうかがわれる。

ヴァージニアはここで半世紀の沈黙を破り，幼いときの自分の感情を過去の女性一般の感情と結びつけ，女性というジェンダーに共通するものとして提示している。そうすることで，彼女ひとりに起きた被虐体験は，女性であればだれもが体験しかねないプライバシー侵害の体験として捉え返されている。これはフェミニズムの意識にもとづく告発であり，今日の #MeToo 運動に通じるものだろう[3)]。

とはいえ，この体験はこうして回想録の中で語られる以前に，小説の登場人

物の体験として，かなり加工された形で何度か表現されている。たとえば『船出』(1915) のレイチェル・ヴィンレスは，国会議員を務める中年男性にいきなりキスをされ，悪夢にうなされる。この悪夢に出てきたイメージは，彼女がのちに熱病で倒れたときに戻ってきて，彼女を脅かす。『歳月』(1937) のローズ・パージターは，夕方の路上で不審者に出会って怖い思いをするが，そのことをだれにも言えないまま，老年を迎えてなお覚えている。また男性の登場人物も，一方的な性的働きかけを体験する。たとえば『波』(1931) のルイスは，幼いときに同年代の女の子ジニーに首筋をキスされ，「すべてがぶち壊しだ」(Woolf, *The Waves* 6) と感じる。

「急な打撃」の瞬間

さらにもう一種類の瞬間は，日常がいつもとちがって見える瞬間である。どこからか降ってわいたように疑問が生まれたり，新しい見方が示されたりして，それまでにない認識がもたらされる。

「過去のスケッチ」で，三例続けて書いてある箇所からそのまま引用したい。いずれもセント・アイヴズの庭先で体験されたもので，それぞれに関連はない。

> わたしはトービー〔兄〕と芝生で取っ組み合いの喧嘩をしていた。おたがい，拳で相手をポコポコと殴りつけていた。彼を叩こうと拳を振り上げたちょうどそのとき，どうして他の人間を傷つけるんだろうと思った。わたしはすぐ手を降ろし，そこに立って叩かれるがままになった。あの気持ちをわたしは覚えている。望みのない悲しい気持ちだった。まるで何かひどいことに，そして自分自身は無力であることに気づいたみたいだった。わたしはひどく塞ぎ込み，しょんぼり立ち去った。

> 正面のドアの脇にあった花壇を見ていた。「あれが全体なのね」とわたしは言った。いっぱいに葉をつけた植物を見ていたら，にわかに明確になったのだ —— その花が大地の一部であり，花であるものは環に囲まれていて，それこそが本物の花，一部が大地であり一部が花であるということが。これはあとでとても役に立つからと，取りわけておくことにした考えだった。

> ヴァルピー家の人たちがセント・アイヴズに滞在し，そして立ち去った。ある晩，夕食を待っていたとき，ヴァルピー氏が自殺したと父か母が言っているのをどういうわけか漏れ聞いた。次に覚えているのは，夜に庭にいて，りんごの樹の脇の小道を歩いていたことだ。そのりんごの樹がヴァルピー氏の自殺の恐怖とつながっているように思えた。樹の脇を通り過ぎるのは無理だった。立ち止まり，グレーがかった緑の樹皮 —— 月夜だった —— を，恐怖に心を奪われて見ていた。まったき絶望の穴にどうしようもなく引きずり込まれ，そこから逃れられない，という気がした。体が麻痺したみたいだった。（Woolf, “A Sketch of the Past” 71）

「過去のスケッチ」で，ヴァージニアはこれらの瞬間を「急な打撃」と呼び，「打撃を受ける能力がわたしを作家にする」と語る（72）。実際，のちのヴァージニアの作品には，これらの体験があちこちに生かされ，フェミニズムの議論を推し進めるものにもなれば，小説の展開を中断させて一瞬の場面を際立たせたり，小説の枠組みになったりしている。たとえば人が人をなぜ傷つけるのかという問いは，『三ギニー』（1938）での家父長制批判と軍国主義批判につながると考えられる。一輪の花が大地とつながっているという感覚は『幕間』(1941）に登場する少年ジョージの抱くものであり，死者が出たためにりんごの樹の脇を通り過ぎることができないのは『波』に登場するネヴィルである。また，りんごの樹のエピソードは日常生活の中に死が潜んでいるという洞察を示すものと考えられるが，『ダロウェイ夫人』（1925）のパラレルストーリーや『灯台へ』の三部構成は，日常の中の死というテーマを前景化するための枠組みと捉えることができる。

不可知論で結ばれた両親

本稿の冒頭で触れたように，晩年のヴァージニアは子ども時代を「あのすばらしい大聖堂のような空間」と呼んでおり，明らかにキリスト教からイメージを借りている。また，上で見たような「急な打撃」の瞬間は，一般には宗教的な啓示として体験されるものである[4)]。これらはヴァージニアの両親がキリスト教の信仰を捨てていたこと，そのためヴァージニアに宗教教育をほとんど与えなかったことを考えれば，意外に感じられる事実である。そこで，ヴァージ

ニアをいったん離れ，両親について見てみたい。

ヴァージニアの父レズリー・スティーヴンは，イングランド国教会クラパム派の家庭で育った。クラパム派は福音主義で，聖書に忠実に日々を生きることを提唱する。「19 世紀のイングランド国教会」において，シェリダン・ギリーがヴィクトリア時代のプロテスタンティズムの特色として述べていることは，クラパム派によく当てはまる。

> ヴィクトリア時代のプロテスタンティズムの特色は，宗教の中心を家庭生活におき，日々の家庭での祈り，聖書講読や安息日遵守，この世界の神聖性の強調などである。ここでは，自己犠牲と弱者への義務をつねに果たすこと，原罪，天国と地獄や最後の審判などに対する信仰告白が必要とされており，この世における喜びに対してはあくまでも淡々と控え目に楽しむ姿勢が求められた。（ギリー 361）

レズリーの母方の曽祖父ヘンリー・ヴェンと祖父ジョン・ヴェンは，クラパム派の中心をなす聖職者であり，ヘンリー・ヴェンの書いた『人の義務の全容，あるいはキリスト教の教義と実践の体系』（1763）は，クラパム派の見解を表したものとして読み継がれた。一方，レズリーの父方の祖父ジェイムズ・スティーヴンと父サー・ジェイムズ・スティーヴンは，クラパム派の信仰を支えにイギリス政府の行政官として働き，イギリス領内の黒人奴隷制廃止に向けて貢献した[5)]。

レズリーはこうして信仰心のあつい家庭で育ったが，のちに信仰を捨てることになった。彼はケンブリッジ大学トリニティ・ホールに進学し，卒業後もトリニティ・ホールにとどまり数学教師となる。この数学教師の職務の中には，イングランド国教会の教会において礼拝を行うことなど，国教会の聖職者にしか果たせない職務が含まれていたため，レズリーは司祭となり教会での説教も行う。ところが哲学の勉強を通じて信仰への疑いが芽生えたために[6)]，大学での数学教師の仕事を辞め，のちに聖職者の資格も返上している。彼はケンブリッジからロンドンに移り住み，ジャーナリストおよび著述家に転身した。彼には数多くの著作があるが，キリスト教信仰への疑念についてはエッセイ「不可知論者の弁明」（1876）などがある。同エッセイによれば，不可知論（agnosticism）とは生物学者 T. H. ハクスリーが 1869 年頃に考案した用語で，

「人間の知力のおよぶ領域には限界がある」（Leslie Stephen, “An Agnostic’s Apology” 1）にも関わらず，キリスト教神学はこの領域を超える部分を対象にしていると批判し，神の実在について判断保留にする立場である。

母のジュリア・スティーヴンは，当時イギリス植民地となっていたインドのカルカッタ出身で，インド在住のイギリス人たち，いわゆるアングロ・インディアンの家系の出である。彼女は2歳のとき，母マリア・ジャクソンに連れられイギリスに渡る。ロンドンのケンジントン地区では，伯母セアラ・パトル[7]が夫トービー・プリンセプとともにリトル・ホランド・ハウスという家を構え，芸術サロンを開いており，ジュリアは母に連れられてこのサロンに出入りする。やがてラファエル前派の画家ホルマン・ハント，同じく画家のジョージ・フレデリック・ワッツ，写真家のマーガレット・キャメロン（彼女の伯母でもある）らが彼女に目を留め，彼女をモデルとした作品を残している。このように，ジュリアは宗教的というより芸術的な関心の高い人たちに囲まれて育ったが，ジュリアをモデルとした絵画や写真にはキリスト教的な題材も含まれているというように，ジュリアは当時の一般的なキリスト教文化にも接していた。

レズリーとジュリアが最初に出会ったのもこのリトル・ホランド・ハウスのサロンにおいてだったが，二人はあまり親交を深めることもないまま，それぞれパートナーを得て結婚した。ところが結婚4年目の1870年に，ジュリアの夫ハーバート・ダックワースは病気により急逝してしまう。寡婦となったジュリアは3人の子どもたち（ジョージ，ステラ，ジェラルド）を育て，慈善活動にも関わりながら，絶望の中でキリスト教への信仰を失った。そしてこの時期にレズリーの「不可知論者の弁明」を読み，共鳴するようになった。

その後レズリーの最初のパートナー，ミニーも，第二子を妊娠中に急逝してしまう。結婚9年目，1875年のことである。ジュリアは隣人としてレズリーを励まし，レズリーの娘ローラの子育ての相談に乗る中で，次第にレズリーと結びつきを深め，二人は1878年に再婚した。

結婚して2年後の1880年に，ジュリアは女性の不可知論者を弁護する文章を書いている。これは同年の『19世紀』誌に，女性の不可知論者は有力な男性の意見に流されてそう思い込んでいるだけだ，などと中傷する記事が掲載された際に反論を試みたもので，生前に出版されることはなかったものの，彼女の意見が堂々と述べられている。たとえば「女たちが男たちに盲目的に追随してい

るだけというのはちがう。女たちが確信をもって，恐れず自分の無知を認めるからといって，人助けをしたり愛したりする力が弱まるわけではない」（Julia Stephen 246）とあり，ジュリアも自分の信念に基づいて「自分の無知を認め」た，すなわち神がいるかどうかはわからないとする不可知論に達したことがうかがえる。

スティーヴン家の宗教教育

不可知論者であったレズリーとジュリアは，下の四人の子どもたちには洗礼を受けさせることもなく，日曜日に教会に連れて行くこともなかった。誕生に際し，両親は代父母（ゴッドファーザー，ゴッドマザー）を知人たちに引き受けてもらったが，代父母はもっぱら子どもたちに贈り物をする程度の関係だった。ヴァージニアの代父はオリヴァー・ウェンデル・ホームズで，アメリカの作家にして讃美歌の作詞家だが，ヴァージニアはとくに信仰を勧められることもなかったようだ。

ヴァージニアらはキリスト教について教わることがほとんどなかったために，他家の子どもたちと異なるふるまいが際立つこともあった。以下は，姉妹で歌の教室に通っていたときのヴァネッサによる回想である。

> ある日，先生がとても真剣な面持ちで，聖金曜日の意味を知っている人はいますかと尋ねたとき，ヴァージニアがクスクスと笑い出したことがあった――もちろん，小さな異教徒だったわたしたちには，どういうことなのか意味不明だった。ところがクラスでいちばんの女の子〔……〕が前に進み出て，わたしたちの主が磔に処された日ですなどと（たぶん正解を）答えたので，ツボにはまったヴァージニアは大笑いして，即座に退室させられた。（Bell 62-63）

ヴァージニアの笑いは，答えがわからなかったことへの照れ隠しとも，みんながありがたがっている宗教的権威への抵抗とも読めるかもしれない。

こうして見てみると，ヴァージニアがキリスト教の語彙や考え方を取り込み，自分の体験と関連づけ，作家としての仕事に役立てていくのはまだ先のことである。ジェイン・ドゥ・ゲイは『ヴァージニア・ウルフとキリスト教文化』

において，キリスト教を排除した場所としてスティーヴン家を捉えるのではなく，「対立しあうさまざまな宗教的立場が繰り広げられる場所」と捉えるほうがよいと提案している（de Gay 19）。親戚には敬虔な国教会信徒も，熱心なクエーカー信徒もいて，スティーヴン家で宗教談義が繰り広げられることもよくあった[8)]。ヘンリー・ヴェンの著書『人の義務の全容，あるいはキリスト教の教義と実践の体系』も，父のレズリーの蔵書に含まれ，やがてヴァージニアがもらい受けることになった（de Gay 23）。

結びに代えて ── 未来のフェミニスト作家の幼年時代

本稿ではヴァージニア・ウルフの幼年時代から，彼女がのちにフェミニスト作家となる下地を作ったと考えられるものを拾い，検討した。

ヴァージニアはごく幼い頃から語り聞かせが好きな子どもで，家族に向け，あらゆる機会を捉えてはスピーチをしたり，物語を作って聞かせたりしていた。その一方で，日常のさまざまな瞬間から多くを感じる子どもでもあった。それらの瞬間の記憶は長いあいだ心にしまわれ，作品を書くようになってから使われ，作中のエピソードになったり，構想や構成のヒントになったりした。

ストーリーテリングの能力と，瞬間からものを感じとる能力は，のちに作家となった彼女にとってはどちらも必要不可欠なものだが，幼年時代においては両者が結びつけられることはなかったようだ。一方の饒舌ともう一方の寡黙が対照的だが，これは不可知論者の両親に育てられ，理性的なふるまいを促されていたために，瞬間から直観的に得たことが言葉にするほどのこととは思えなかったからかもしれない。しかし同時に，宗教教育を受けなかったために，キリスト教の枠組みにとらわれずにものを感じることができるという利点もあった。

のちにフェミニストになっていく原体験としては，年齢の離れた異父兄からの性的虐待という事実が挙げられる。この事実を，晩年の彼女が瞬間の体験の一つとして，他の体験と並べて提示しているのは示唆的である。彼女にとって，この体験はフェミニズム的に捉え返せるものだったが，同時に他の体験と同様，作家としてのインスピレーションの源となってきたものだった。作家であることとフェミニストになることは，彼女にとって不可分の実践だったようだ。

本稿で追ってきたのは10歳頃までのヴァージニアの体験だが，こののち，兄トービーや弟エイドリアンが学校教育を受け，ヴァネッサと自分は家にとどまるようになると，彼女は男女の教育機会のちがいを体感していくことになる。さらに彼女が13歳のときには母が急逝し，タランド・ハウスでの世界との一体感の記憶は母の記憶と結びつけられ，フロイトの用語でいう前エディプス的憧憬となっていく。これらの第二，第三のフェミニズム作家の原体験については，次稿以降に改めて見ていくことにしたい。

注

1）ハイド・パーク・ゲートはケンジントン公園のすぐ南に位置する通りで，ケンジントン公園がかつてハイド・パークの一部だったためにこの名がある。数百メートルの範囲にロイヤル・アルバート・ホールやケンジントン宮殿などがあるこのエリアはケンジントン地区と呼ばれ，19世紀後半以来，貴族，アッパー・ミドル・クラス，名声を得た芸術家などが集まる裕福な地区となっていた。

2）『ウルフの部屋』で，宮田恭子は1989年に実際にセント・アイヴズを訪ねた印象を記しており，優れた紀行記となっている。「セント・アイヴズは，人影を見ることの稀な荒野（ムア）の広がるペンウィズで，賑わいを一所に集めたような海浜の町である」（宮田7）。ヴァージニアの両親についても詳しい記述がある。

3）拙論「ヴァージニア・ウルフの #MeToo」では，ウルフにおける性被害と中絶の表象を考察した。

4）ヴァージニア自身，回想録ではキリスト教的な用語も使っており，この「打撃」の体験から「ある種の啓示（a revelation of some order）」が得られると述べている。しかし同じパラグラフには「明らかにはっきりと神はいない」と述べられており，彼女の立場が既存のキリスト教には該当しないことも強調されている（Woolf, “A Sketch of the Past” 72）。

5）黒人奴隷制反対運動家としてウィリアム・ウィルバーフォースが有名だが，彼もクラパム派の信仰を持っていた。この運動によって1807年に奴隷貿易が廃止され，1833年にはイギリス領内の奴隷所有が禁止される（ギリー361）。1833年の法律を起草したのは，植民地局に勤めていたサー・ジェイムズ，レズリーの父である（de Gay 29）。

6）レズリー自身は，晩年に次のように回想している――「わたしはコントも読んで，何よりもノアの洪水はフィクションであり（あるいは昔から信じていなかったのであり），この物語を聖なる真実のように読むのは間違っていると確信するようになった。だからトリニティ・ホールの仕事を辞めねばならなかった」（Leslie Stephen 6）。コントとはフランスの哲学者オーギュスト・コントのこと。

7）本稿の冒頭で述べた，ヴァージニアに列車事故の荒唐無稽な想像をさせた人物で

ある。

8）レズリーの妹でありヴァージニアの叔母にあたるキャロライン・エメリア・スティーヴンは，レズリーの最初の妻ミニーの影響でクエーカーになった。ジェイン・ドゥ・ゲイは，ヴァージニアがこの叔母との語らいから，キリスト教についてのさまざまな考察を得たと述べているが，ヴァージニアが彼女と親交を深めるのは 1904 年以降だから，やはりまだ先の話である（de Gay 41-47）。

参考文献

Bell, Vanessa. “Notes on Virginia’s Childhood.” *Sketches in Pen and Ink*. London: Pimlico, 1997.

de Gay, Jane. *Virginia Woolf and Christian Culture*. Edinburgh: Edinburgh UP, 2018.

Lee, Hermione. *Virginia Woolf*. London: Chatto & Windus, 1996.

Stephen, Julia Duckworth. “Agnostic Women.” *Stories for Children, Essays for Adults*. New York: Syracuse UP, 1987.

Stephen, Leslie. “An Agnostic’s Apology.” *An Agnostic’s Apology and Other Essays*. London: Smith, Elder, & CO., 1903.

_____. *Mausoleum Book*. Oxford: Clarendon Press, 1977.

Woolf, Virginia. *To the Lighthouse*. Oxford: Oxford University Press, 2008.

_____. *The Waves*. Oxford: Oxford University Press, 2015.

_____. “A Sketch of the Past” in Jeanne Schulkind (ed.), *A Moment of Being*. A Harvest Book, 1985.

_____. Ed. by Nigel Nicolson and Joanne Trautmann, *The Letters of Virginia Woolf, Volume Six: 1936-1941*. New York and London: A Harvest/HBJ Book, 1982.

片山亜紀「ヴァージニア・ウルフの #MeToo」『季論 21』49 号，2020 年，173-90.

ギリー，シェリダン「19 世紀のイングランド国教会」，ギリー，ウィリアム・J・シールズ編『イギリス宗教史 ── 前ローマ時代から現代まで』指昭博，並河葉子監訳，法政大学出版局，2014 年.

宮田恭子『ウルフの部屋』みすず書房，1992 年.

Becoming a Feminist Writer (1):

Virginia Woolf in Her Early Childhood

Aki Katayama

How did Virginia Woolf become a feminist writer? This paper looks at her early childhood, especially her first 10 years, and examines the elements which may have contributed to her writing and feminist consciousness.

Her talent as a storyteller and the sensitivity she presented for moments were essential for Woolf to become a professional writer. However, those two were never synthesized when she was a child.

On the one hand, she loved storytelling from a very early age: she made stories and speeches, narrating them at various occasions to her family members.

On the other hand, she felt complex feelings from various moments, especially during her stay at Talland House in St Ives, where she and her family spent summer months every year, until her mother suddenly died. There, Woolf had various moments, when, for example, she felt a sense of unity with the world; when she was sexually abused by her half-brother; when she experienced "sudden shock," reaching some new recognition. She didn't tell anyone about these experiences at that time, but never forgot them, and used them when she wrote novels and essays.

Her silence over those experiences may have resulted from the fact that both of her parents were agnostic, denying mystical experiences such as revelation. At the same time, Woolf didn't follow Christian teachings, which allowed her to think beyond the confines of a pious upbringing.

In her early childhood, her impulse of storytelling preceded her feminist awareness. However, her sexual assault was one of the primary experiences that led her to become a feminist. She repeatedly used that experience in her later fiction in much modified ways, and revealed the fact finally in her memoir, which she wrote at the end of her life. This shows that writing novels and becoming a feminist were a life-long endeavor, and that those two were closely related.